「John Adams Hall (2015 年)」という作品は、私が学生時代の２年間を過ごしたロンドン大学の学生寮、ジョン・アダムス ホールで出会った３人の人物を描いている。その３人とはユミコという一見、学生には見えない年代の女性、不親切で有名な受付のジェッド、そしていつも歌をうたっている清掃係のレベッカである。この作品は、彼らに好奇心をそそられた私が、やがてそれぞれ人物の秘密を発見するまでに至る、３人との関係性の移ろいを表している。

2014 年、私はある小さな島の「マラ小学校」に最後に残されたたったひとりの生徒のことを聞いた。私はその生徒の生活に興味を持ち、リサーチのためその島を訪れた。しかし撮影を始めてまもなく、カメラが授業の邪魔になることが分かり、学校を後にした。
島をあても無く歩いている時、ベンチの下で寝ている犬を見かけた。
「Island」は、日々、フェリー最終便が出た後は空っぽになってしまうこの島に暮らす数人の住民を映し出す映像作品である。映像を通じて、あなたは今どこにいるのか？なぜここにいるのか？あなたに何が起こったのか？を観客自身に問いかけている。
私は映像を見る人に、被写体のことを気にかけている彼ら自身の存在に気づいて欲しいと思っているのである。 すぐそばを通る観光客も意に介さず、一時間以上寝ている犬を見て「この犬はどこから来たのだろう、飼い主はいるのだろうか。食べるものはあるのだろうか、病気なのだろうか？」など様々な問いが思い浮かんだ。

近代の哲学者、エマニュエル・レヴィナスは、他の存在を問うことは自分自身の存在という奇妙さを経験することだ、と言っている。問いかけがなんらかの答えや真実をもたらさずとも、この思考のプロセスそのものが、問い自体を超えた存在というものを気づかせてくれる場になるのだ。

私のカメラを通して被写体の真実というものを見せることはできないと思っている。私がアーティストとしてできるのは、私のカメラの視線を通して見る人に被写体に対する彼ら自身の問いを考えさせること、私の編集を通して観客に好奇心を呼び起こすことだ。

Artist Statement

私の作品は現実に起こっていることを基にしているため、ドキュメンタリーと捉えられます。実在する人々との関係性の中で、ある特定の人たちに好奇心を刺激されることで、問いが生まれます。私の作品はそういった問いへの私自身の反応です。このドキュメンタリー作品はアートでもあり、実験映像でもあります。ドキュメンタリーの新しいかたちとして、映像素材をコラージュすることによって新たな「モード」や「ストーリー」を創り出すことを目指しているのです。被写体との関係性の変化を時間をかけて追っていくこと。私と被写体の間の交わりや衝突、揺れ動く感性などの経過を記録することによって、被写体と観客、そして私自身の倫理的な関係を問う「場」を作りたいのです。他者へ問いかけることは、彼らに思いを向けることです。自分以外の存在に関する真実を、全て知ることはできないかもしれませんが、それを考え続けることに大きな意味があるのだと思います。

作品「ご飯、食べましたか？」について

『スプーン一杯には一体いくつの米粒があるのだろう？』と思ってスプーンの上の米粒を数えていた時に、小さな虫を偶然見つけた。そして次の瞬間に私の頭には「この虫にとって一粒の米とは何なのだろう」という問いが浮かんだ。日常生活の中で生まれた好奇心はやがて「Did you eat rice?」というプロジェクトにつながっていく。アジアの国では「ご飯、食べましたか？」という言葉はお米のことではなく「（朝食、昼食、夕食など時間の決まった）食事はしたか？」という意味であることが多い。また、調子が悪そうな人に使われる「どうしてる？」「元気？」「大丈夫？」などの意味として使われることもある。
この実験映像作品「Did you eat rice?」では信濃大町の農家の日常生活、特に稲の収穫の際に現れる、彼ら農家と自然の繊細な関係性が描かれている。映像の中で作品が「ご飯、食べましたか？」と問いかけるのは、農家や米栽培ワークショップに訪れた小学生、水田に潜む虫、土、そしてご飯の度に見る、米の一粒といったたくさんの被写体である。

Introduction of current work ‘Did you eat rice?’

“How many grains of rice are there in a single mouthful?” While counting these grains, I met a tiny insect by chance. I immediately thought, “How would this insect perceive this grain of rice?” These curiosities in my daily life continues within the project ‘Did you eat rice?’
In Asian food culture, ‘Did you eat rice’ means ‘Have you had food (usually refers to a specific meal: breakfast, lunch or dinner)?’ Additionally, it could also be used especially when greeting others that one may be concerned about, for example, “How have you been?”, “Are you OK?”, or “Is everything all right?”
The experimental documentary film ‘Did you eat rice?’ features some sensitive relationships between some local farmers and Nature, which can be seen in their ordinary lives and especially during the rice harvest in Shinano-Omachi, Japan. Within a filmic relationship, this work asks the question of “Did you eat rice” to various subjects in the film, including the land, the farmers, primary school students who have experienced rice growing workshops, the insects who dwell within the rice paddy and even single grains of rice that are present in every meal.

エリー・キョンラン・ホ　Ellie Kyungran Heo

主題として選んだ記録映像をコラージュのようにつなぎ合わせる手法で、実験的な映像作品を制作するアーティスト兼映像作家。作家とテーマの間で生まれ、刻々と変化する交流、衝突、揺れ動く感性の経過を記録する。制作過程において、そのテーマと観客、そして作家自身の倫理的な関係性が問われる「場」を生み出そうと試みる。1976 年韓国生まれ。高校美術教諭の経験を経たのち、ロンドン芸術大学卒業、ロイヤルカレッジオブアートを修了。

エリー・キョンラン・ホ：ご飯、食べましたか？
展示場所：いっし・あーとすぺーす

信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展

稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE

２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒398-8601　長野県大町市大町 3887
（大町市役所　総務部まちづくり交流課内）
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業

エリー・キョンラン・ホ
Ellie Kyungran Heo
ご飯、食べましたか？
Did you eat rice?

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

エリー・キョンラン・ホ

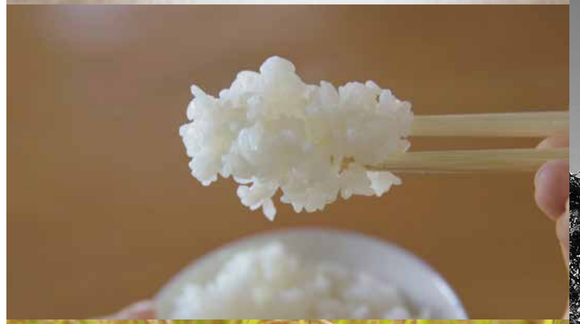
Ellie Kyungran Heo/ 韓国

Interview

■信濃大町での滞在制作はいかがですか。
「時・水・稲作」というテーマに共感してあさひ AIR に応募して、本当に良かったと思っています。大町に初めて着いた時、黄金色に揺れる田んぼに感激しました。私は滞在期間中、様々な場所で稲作を取材、撮影させていただきました。黄金色に揺れる稲穂、収穫、日干し、脱穀、そして藁をまた田んぼに戻している姿にエネルギーの循環を感じ、沢山の大町の人たちと出会って、その真摯な生活に胸をうたれました。私の中で、深い黄金色の籾の内側の、真っ白できれいな米粒が大町の人のイメージと重なって、大町の人はお米みたいだと思うようになりました。

■エリーさんの将来の夢ってなんだったんですか？
私は昔から、学校の先生になりたいと思っていました。小学生の時は小学校の先生になりたかったし、中学生の時は中学校の先生になりたかった。素敵な先生がいて、そんな大人になりたいなと、先生に自分を投影していました。中学校の美術の先生が私にアートを勧めてくれたんです。高校の時も高校の先生になりたかったのですが、大学では、大学の先生にはなりたいとは思いませんでした。それもあって大学を卒業してから 6 年間、高校で美術教師をしていたんです。

■美術の先生から、なぜアーティストになったのですか？
私にとって 6 年間高校の美術教師をしていたことは、あらゆる意味で良い経験だったと思っています。クラスを受け持って教えた子供たちはそれぞれ、全く違う個性を持っていました。その時に実感した「多様性」は、私のアーティスト活動における大切な軸になっています。アーティストへの道を踏み出したのは、先生として一生過ごす事に迷っていた時に、ノマド的生活についてのある本に出合ったのがきっかけです。教師の仕事は本当に楽しかったのですが、自分にとって心地よい場所から抜け出して、より自由に生きる方法を試してみたいと思い、一念発起して、イギリスの美術大学に入りました。最初は自分がどんな方法で表現をしたらいいのかわからず、とにかく色々な表現方法を試して、自分にふさわしい、自由に開かれた表現を模索しました。その頃にアマ・カンワというインドの実験的な映像作家の作品に感銘を受けて、私自身も実験的な映像作品を撮り始めたんです。

■エリーさんにとって、アートとはなんですか？
私は、世界は見えるものが全てではないと思っています。別の言い方をすると、私たちが見ている全ては、私たちが見えない事によって創造されている。その「見えない事」に向き合う事が私のアート作品なんです。主題になる人や現象と出会い、長く深く関わるうちに主題との関係性が変化していく事自体を、客観的なカメラが記録する、という手法によって、ドキュメンタリー（記録映像）とフィクション（物語）の境界がわからなくなるような作品になります。私は自分の映像を「実験的ドキュメンタリー」と位置づけています。それは客観的な事実に基づいた記録映像ではなく、私と主題との関係性自体を実験、記録する私の物語なんです。それは何か刺激的で突飛な驚くべき事ではなく、普通の日常から滲みでるユニークさに一喜一憂するような、静かな変化の軌跡です。
また、私の実験的ドキュメンタリーを観客と共有するためには、どんな場所で、どんな音響で、どんな風に編集された映像作品と出会うのか？という事が大切です。私は何かメッセージを伝えたいわけではなく、観客が私と一緒になにかについて深く考える事のできる場所を創りたいと思っています。ですから、映画館の様な場所で決められた時間に大勢で映像を見ることよりも、観客が主体的に映像と向き合う「場所」をつくることで、映像の向こう側で私が感じている「見えない事」を感じてもらえたらうれしいです。

■最後に、大町の皆さんに一言お願いします。
映像作品「ご飯、食べましたか？」は、私から皆さんへの質問のようなものです。私はあさひ AIR に応募してからずっと「一粒のお米」について考えていました。大町の滞在制作を通して、本当に素敵な人たちに出会って、「一粒のお米」とはなんなのか、私なりの答えをみつけました。人とお米の自由な関係を考えながら制作した作品です。ぜひ、観て頂いた皆さんにも、「一粒のお米」について思いを巡らせていただけたらうれしいです。